

待兼山俳句会

第六百九十五回 世話人 山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来眞知子

東中 亂・向井邦夫・森 茉衣

令和六年十二月十六日（月） 会場 大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時

出席者 濱戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・東中 亂・東野太美子

向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者 碓井遊子・西條かな子・寺岡 翠・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子・平井瑛三

以上出席者十一名+投句者八名 計十九名

兼題 咳・鱈（幹三） セーター・冬木立（暁子） 当季雜詠 通じて八句

次回 例会 令和七年一月二十日（第三月曜日）会場 大阪俱楽部会議室 締切 午後二時

兼題 春待つ・凍蝶（幹三） 食積（喰積も可）・冴ゆる（暁子） その他当季雜詠

選者吟

日と風を素通しにして冬木立

鱈の身のほろと崩るる鍋の中

セーターの意外な色が似合ふ歳

幹三

セーターの色にこだはる老であり
セーターの人ら大きなピザを食べ
登校の子ら鈴つけて冬木立

暁子

幹三 選

◎鱈汁のぐつぐつ煮えて京暮るる
セーターや少年Hの戦時中
夜半の咳重たき闇をゆるがせて
北極圏入りの祝膳鱈の舌

◎形崩れ綻びてなほこのセーター
咳けば小さき悪魔の飛び出せり
◎鱈を干すフイヨルドごとの風の道
◎少しだけ目立つセーター着て街へ

咳こんでますます老の身の縮む
鱈鍋や美味しいねえと独り言
咳の子の寝息確かめ灯を落とす
手編てふセーター重きプレゼント

小枝さへきつぱり見えて冬木立
咳一つ収めて壇の上に立つ
登校の子ら鈴つけて冬木立
白葱の濡るるが如く光りをり
セーターの色にこだはる老であり
冬木立今夕陽落つ闇が原
白磁の壺枯山吹の実の光る
兄遺す手編みセーター身に合ひて

安廣	和江	眞知子	兵十郎	乱	邦夫	兵十郎	盛雄	暁子	暁子	邦夫	堯子
乱	安廣	暁子	兵十郎	暁子	邦夫	兵十郎	暁子	暁子	暁子	堯子	堯子

◎冬木立歩けば径の延びてゆく
見上げれば話し合ひたる冬木立
咳ぶける人と二人のエレベーター
電飾の道具となりて冬木立

◎時刻む刻一刻と咳の夜
セーターの人ら大きなピザを食べ
足許にとどく日淡し冬木立

◎枝の先の先まで力冬木立
阿吽の呼吸でセーターほどく母娘
年を経た古いセーター暖かし

鱈船の鱈汁煮立つ北の海
湖東なる山懐の紅葉寺
見上げれば空広々と冬木立

・鱈汁のぐつぐつ煮えて京暮るる
誰しも冬の京都には特別な思いがあります。湯気を立て
る鱈の鍋でその思いが描かれました。俳句ならではの表現
だと感心いたしました。

輝子	邦夫	堀子	堀子	太美子	太美子	暁子	暁子	暁子	暁子	堀子	堀子
輝子	邦夫	堀子	堀子	暁子	暁子	暁子	暁子	暁子	暁子	堀子	堀子
安廣	安廣	安廣	安廣	太美子	太美子	朱美	朱美	朱美	朱美	安廣	安廣
安廣	安廣	安廣	安廣	眞知子	眞知子	瑛三	瑛三	瑛三	瑛三	安廣	安廣
兵十郎	兵十郎	兵十郎	兵十郎	太美子	太美子	遊子	遊子	遊子	遊子	兵十郎	兵十郎
兵十郎	兵十郎	兵十郎	兵十郎	暁子	暁子	瑛三	瑛三	瑛三	瑛三	兵十郎	兵十郎

幹三 特選句講評

安廣

誰しも冬の京都には特別な思いがあります。湯気を立て
る鱈の鍋でその思いが描かれました。俳句ならではの表現

・鱈汁のぐつぐつ煮えて京暮るる
誰しも冬の京都には特別な思いがあります。湯気を立て
る鱈の鍋でその思いが描かれました。俳句ならではの表現
だと感心いたしました。

・形崩れ綻びてなほこのセーター

乱

セーターへの愛着をもつとも感じた句でした。5・6・6という破調も作者が語っているライブ感があつて抵抗はありませんでした。

・鱈を干すフイヨルドごとの風の道

兵十郎

鱈と言えばノルウェーです。深い入江ごとに吹く風があり、それが鱈を硬く硬く乾かしてゆくという旅人の詩です。私も北欧の旅を思い出しました。

・少しだけ目立つセーター着て街へ

盛雄

セーターという防寒着をおしゃれとして楽しんでおられます。句には余白がたっぷりあり、町の様子や作者の浮き浮きした表情も見えてきます。

・冬木立歩けば径の延びてゆく

輝子

冬木が続く長いまつすぐな道です。色を失った並木道では遠近も分りづらくなり、それがまた冬の雰囲気。「径」は「道」の方が合っていると思います。

・時刻む刻一刻と咳の夜

安廣

咳の発作は間をおいて繰り返されます。静まつた夜の時間の経過が「咳の時間」によつて身に沁みます。漢字の並びにもリズムがあつて面白いですね。

・枝の先の先まで力冬木立

太美子

木が幹と枝だけになつて氣づく力強さです。枝からは枝が生え、先の先まで生きていることを感じます。冬を越そうとしている逞しさです。

暁子 選

セーターの豊かなる胸ふとちら見

邦夫

風に鳴ることの無くなり冬木立

幹三

◎通院は我が晴れ所セーター買ふ

輝子

パリの街このセーターを買ひし日を

安廣

大落暉赤く燃え立つ冬木立

翠

寄せ糸のセーター敗戦国の吾

かな子

咳ぶける人と二人のエレベーター

堯子

スースンギピンクのセーターママの顔

恵子

今年またこのセーターの温み着る

真知子

病篤き母は咳にも気兼ねして

輝子

冬木立今夕陽落つ閑が原

咳の子のやうやく眠る頬あかく

◎咳の子の休むときめて甘えだす

◎手編てふセーター重きプレゼント

見上ぐれば空広々と冬木立

白磁の壺枯山吹の実の光る

大紅葉なに気兼ねなく御所の空

◎冬木立歩けば径の延びてゆく

大阿蘇は涅槃五岳の冬夕焼

冬の月長樂館に冴え光る

冬木立透けて山並みくつきりと

イエスつて誰と聞かれるクリスマス

◎黄昏に切り絵となりぬ冬木立

鱈を干すフィヨルドごとの風の道

セーターの意外な色が似合ふ歳

暁子 特選句講評

・通院は我が晴れ所セーター買ふ

「晴れの場所、晴れがましい場所」という意味の「晴れ所」なる語があることを知らなかつた。作者の造語かと

輝子

幹三

兵十郎

太美子

太美子

葉衣

葉衣

堯子

堯子

盛雄

輝子

乱

兵十郎

瑛三

太美子

輝子

かな子

輝子

安廣

思つて辞書を引くとちゃんと載つていた。病気になつたり、高齢になつたりして、出かける晴れの場は病院といふのは悲しいが、それが現実である。そしてしようと思ふ洒落は、ドレスではなくセーターなのだ。以前ある大病院できらびやかに着飾つた三人連れの女性に対し、やくざ風の男性が「デパートと間違うと/orのか！」と怒鳴つていたのを思い出す。

・咳の子の休むと決めて甘えだす

輝子

「今日は学校を休んだ方がいいね」と母に言われた子どもたちを切り取られた。張りつめていた気持ちがほつと解ける一方で、学校を休むという辛さもある。けれど今日は母に甘えてもよいのだと、布団の中でにつこり。

・手編みてふセーター重きプレゼント

太美子

私たちの若い頃はまだこういう手作りのプレゼントが多くつた。不器用な私などはせいぜいマフラーか手袋しか編めなかつたが、手編みのセーターを贈られた方は、暖かな着心地だが、心は重くなる人もいることだろう。一目一目心を込めて編まれたことが裏目に出で、相手の心を縛ることもあるだろう。

・冬木立歩けば徑の延びてゆく

輝子

「徑」の第一義は「小道」である。この句を読んだ時、私はどこまでも続く一本の道があつて、その両側に冬木立が並ぶ、いわば映画「第三の男」のラストシーンのような風景を思い描いた。それで会場では「道」の方がよいと言つたのだが、今読み返してみれば作者は枯草の中に続く山林の小道を歩いておられたのかと思われる。どこまでも歩いていきたい徑である。

・黄昏に切り絵となりぬ冬木立

太美子

この句の風景には誰もが頷くだろう。葉のある木なら藤城清治だろうが、冬木立ならきっとした滝平二郎の切り絵か。上五の「に」がやや説明的で、僭越ながら個的人的には、眼前の景をより生き生きと描くのに「黄昏や切り絵となれる冬木立」ではどうかと思う。

互選三句

朱美 選

セーターを一枚重ねて庭を掃く
小春日やフランスパンを下げ帰る
寄せ糸のセーター敗戦国の吾
満州から引き揚げるとき同じようなセーターを着ていた。

茉衣 遊子 かな子

瑛三 選

古けれど好きなセーター毛玉切る

輝子

黄昏に切り絵となりぬ冬木立

太美子

咳の子の寝息確かめ灯を落とす

眞知子

和江 選

比良風まろやかにして冬木立

兵十郎

時刻む刻一刻と咳の夜

安廣

もう魚と思へぬ干鰐少し買ふ
干鰐への哀感、ふと我が身にも。

輝子

かな子 選

もう魚と思へぬ干鰐少し買ふ

輝子

マネキンは素肌にセーター着せられて

暁子

黄昏に切り絵となりぬ冬木立

太美子

高村光太郎の”きつぱりと冬が来た”という詩を思い出す。

邦夫 選

咳の子のやうやく眠る頬あかく
鰯の身のほろと崩るる鍋の中
夜半の咳重たき闇をゆるがせて
深夜の酷い咳は「闇を搖るがせ」家族を狼狽させる。

かな子 幹三 眞知子

恵子 選

咳の子のやうやく眠る頬あかく

かな子

銀鱈に酒と菜あり至福あり

乱

夜半の咳重たき闇をゆるがせて

眞知子

静寂の中に響く咳を上手に表わされて凄いと思いました。

兵十郎 選

時刻む刻一刻と咳の夜

安廣

鱈船の鱈汁煮立つ北の海

瑛三

がつちりと大地に根付く冬木立
しつかり根を張っている冬木立の大きな景が見える。

邦夫

堯子 選

冬木立歩けば径の延びてゆく

輝子

通院は我が晴れ所セーター買ふ

輝子

少しだけ日立つセーター着て街へ

盛雄

繁華街をうきうきとした気分で歩く姿が目に浮かぶ。

茉衣 選

鱈の身のほろと崩るる鍋の中

幹三

枝の先の先まで力冬木立

太美子

黄昏に切り絵となりぬ冬木立

太美子

黄昏の空の色彩を背景に立つ冬木群はまさに切り絵の世界。

眞知子 選

鱈船の鱈汁煮立つ北の海

瑛三

咳の子の休むときめて甘えだす

輝子

電飾に身を包まれし冬木立

瑛三

クリスマス頃の冬木立はイルミネーションの木です。

輝子 選

棒鱈を水に戻して家事を終ふ

和江

小春日やフランスパンを下げ帰る

遊子

鱈を干すフイヨルドごとの風の道

兵十郎

大きな景色の中の小さな喰み。短詩にうまくまとめられた。

翠 選

咳の子の休むときめて甘えだす

輝子

鱈を干すフイヨルドごとの風の道

兵十郎

咳ぶける人と二人のエレベーター

堯子

声をかけようか迷つてゐるうちに盲目的についてしまつた。

即吟

令和六年最後の即吟です。

今回句会を彩ったのは枯山吹と柊でした。山吹は八重咲ではないので実を結ぶのだと、黒い実を付けて薄い黄緑の葉を残しています。クリスマスに欠かせない柊の枝には赤い輝く実がついています。どちらも私たちの句会に初登場。

ひとこと

山田安廣

いよいよ年の瀬となりました。

今年一年選者のお二人には大変お世話になりました。
ご指導有難うございました。

また、会員の皆様方には何かとご協力本当に有難うございました。

小さき家灯す柊大樹かな

枝先に枯山吹の子孫あり

目を凝らす枯山吹にこれがまあ

枯と名の枯山吹に実のつきぬ

壺に入りし枯山吹に風の色

枯山吹日毎にみどり淡々と

柊の実の丸々と聖なる日

柊の朱い実冬を輝かす

山吹の枯れていよいよ枝細し

枯山吹古き時代の色添へて

花柊鼻防禦して香を貰ふ

暁子

邦夫

恵子

堯子

太美子

輝子

兵十郎

茉衣

幹三

安廣

乱

合同句集への投稿は来年一月二十日が〆切です。既にお知らせしました投稿要領に則って当日までに必ず投稿下さいますようよろしくお願ひ申し上げます。

なお、来年より恵子さまが会計係を引き受け下さいます。よろしくお願ひ申し上げます。大役を引き受け頂く恵子様には本当に感謝です。

それでは皆様方お健やかに良い年をお迎え下さい。